

授業場面における“IRE”連鎖開始部の認識可能性について

上越教育大学 五十嵐 素子
京都大学 平本毅

1 目的

授業場面の研究では“IRE”連鎖（Initiation-Reply-Evaluation sequence）（Mehan 1979）が、教師から開始される生徒との基本的な相互行為の連鎖であるとされてきた。この連鎖は、多くの授業の会話研究において参照され、また授業以外の教育的なやりとりでも同様の現象が見いだされ、その働きについて論じられてきた。“IRE”連鎖は、もともと様々な連鎖を包括し総称した概念であり、その後の経験的な観察において体系的に論じられてきたようには見えない。だが“IRE”連鎖がいかなるものであり、その認識可能性を支える条件が何であるのかを考察しておくことは、（一斉）授業場面の相互行為のあり方を体系的に研究するためには欠かせない。このため、本研究はその端緒として“IRE”連鎖の開始部（I）がいかにその連鎖の開始として認識可能であるのかということを行為の形成（action formation）」（Schegloff, 2007）という観点から捉え直すことにしたい。

2 方法

本報告では“IRE”連鎖の定義（Mehan1979:54）として、教師から開始される二つの隣接対の組み合わせ（coupled）であることを念頭に置きながら、連鎖の開始部に関する特徴を導出し、「行為の形成」の観点から小学校の授業の録画データのうち対象を含む事例を検討する。まず、この連鎖は、隣接対のように、それが第二成分で終わるのではなく、第三成分が来ることが期待されるような三部構造をなす。これは、隣接対の後に後続の発言が置かれる Sequence-closing thirds（receipt, evaluation, etc.）（Schegloff, 2007）とは異なり、第三成分が来なければその不在が気付かれるほど、第一成分あるいは第二成分と第三成分が強い規範的繋がりを持つ。この際、連鎖の開始部は、第三成分までの“IRE”連鎖の構造を投射する特徴を持った行為として形成される。この特徴から、Mehan(1979)の“IRE”連鎖の説明や事例を再検討したところ、“IRE”連鎖として包括されている連鎖のうちいくつかのバリエーション（ex.informative, directive, Mehan1979 :73）は、三部構造が基本とはならない可能性が見いだされた。このため、誘導連鎖（elicitation sequences）と呼ばれる生徒の知識状態を引き出してテストするような質問を開始に持つ三部構造の連鎖を中心に検討する。

3 結果と結論

一斉授業の事例を横断的に検討した結果、例えば、算数の計算の事例の 01 のように教師が生徒に答えるべき対象をあらかじめ示して質問している場合には、第三成分が来ないのに対して、03 のようにそれが隠されている質問では第三成分が関連性を持って置かれることが見いだされた。このような検討の結果、開始部（I）となる教師の質問に関して以下の特徴があると考えられた。（1）尋ねられている知識が生徒が持っていることが適切である質問であること、（2）尋ねられている知識を先生が持っていることがわかる質問であること、（3）質問を聞くことが期待される相手がクラス全体であることがわかる質問であること（4）質問されたときにはまだ正答が提示されていないこと、である。

事例（（以前教えた足し算の仕方を黒板に書きながら確認している場面。T は教師、S は複数の生徒の発言を示す））

01 T: 9 と 10 を（と書いてチョークで二つの数字を囲む）（。）まとめましたか：：？（黒板が生徒に見えるように質問する）

02 S: は：：い。（言いながら手を挙げる）

03 T: 半分くらいかな：：。そしていくつになりました？（言いながら黒板に書くが回答は体で隠されて子どもには見えない）

04 S: 10 です。

05 T: ですね。